

第5表 くず果時期別発生割合

区	夜温	地温	項目 育苗夜温	収穫始～4月中旬		～5月中旬		～6月中旬		全 期	
				本 数	発生率	本 数	発生率	本 数	発生率	本 数	発生率
1	15	15	15	1.1	15.9	4.8	35.6	6.3	26.6	12.1	27.4
2			10	2.1	51.2	4.3	32.8	5.8	26.9	12.1	31.2
3		10	15	1.0	17.2	3.3	26.6	6.4	29.2	10.6	26.4
4			10	1.5	41.7	3.1	24.4	5.5	26.2	10.1	27.1
5	10	15	15	0.8	23.5	4.3	32.8	6.7	31.6	11.8	31.3
6			10	1.5	68.2	4.9	38.0	6.9	32.9	13.3	36.8
7		10	15	1.0	38.5	3.4	30.6	6.0	30.9	10.3	31.1
8			10	0.7	63.6	4.8	40.7	6.3	28.9	11.7	33.7

注. 発生率 = $\frac{\text{当該時期の下物収量}}{\text{当該時期の全収量}} \times 100$

4 考 察

育苗夜温を15℃と10℃にした場合は、10℃のほうが生育が劣り、収穫始めが遅れるが、雌花の着生および側枝の発生が多い。しかしながらこの雌花および側枝は直ちに収量に結びつくものではなく、退化するものが多く、栄養生長との均衡との問題がある。定植後夜温は収量を支配する大きな要素とみられ、15℃では栄養生長を促し、収穫期を早め、上果を多くして多収を示した。地温は高夜温の下では15℃が幾分収穫期を早め収量を多くする効果があったが夜温に比

し影響が少なかった。しかしながら低夜温の下では、これを補足する効果があるものと思われた。

以上により当温度処理の範囲では育苗夜温、定植後夜温、地温ともに15℃が最高の収量を得たが、前報において報告した成績とあわせ検討すると、春系キュウリの実用的地温は15℃にあるものと推定され、夜温については育苗時から定植後初期は15℃に近い温度に、収穫の始まるころより10～15℃の間に適温があるものと推定される。今後は、低温育苗を行ない発生の多い雌花および側枝を有効に用いるような温度管理および経済性について検討する予定である。

夏秋キュウリのおそまき栽培試験

大 友 詔 次 郎

(福島県園試)

1 ま え が き

福島県の夏秋キュウリ栽培は年々増加しており、それに伴い栽培期間の前進および延長が試みられるようになった。

は種期が遅れるほど通常減収するが、本試験ではおそまきの場合(6月下旬以後)の減収程度を知り、増収方策を栽植株間の面から検討しようとしたものである。

2 試 験 方 法

1 品 種 新光A号

2 試験区

№1 は種期6月10日 株間90cm (対照)

№2 " 6月30日 " 45cm

№3 " 6月30日 " 60cm

№4 " 7月10日 " 45cm

№5 " 7月10日 " 60cm

№6 " 7月20日 " 30cm

№7 " 7月20日 " 45cm

3 試験区の規模 1区10.8m², 2区制

4 栽植方法

(1) うね幅 3m, 2条植

(2) 合掌型ネット支柱使用 合掌幅 2.1m, 高さ 2.4m

5 施肥量

N : 45 Kg / 10 a, P_2O_5 : 35 Kg / 10 a,
 K_2O : 45 Kg / 10 a

6 整枝方法 放任

3 試験結果

1 生育状況 収穫最盛期の9月11日および収穫

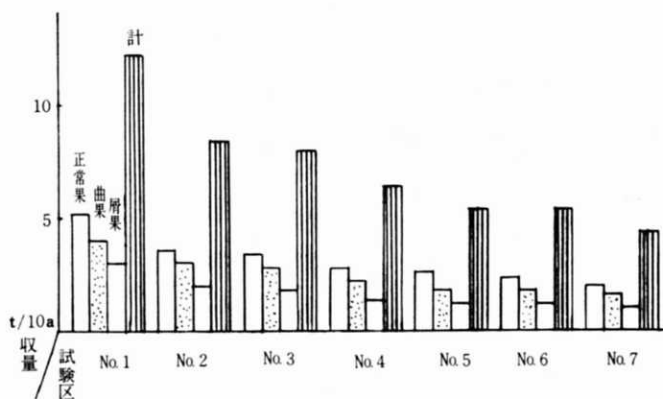
2 収量

第1表 品質別収量 (2区合計, 21.6 m²)

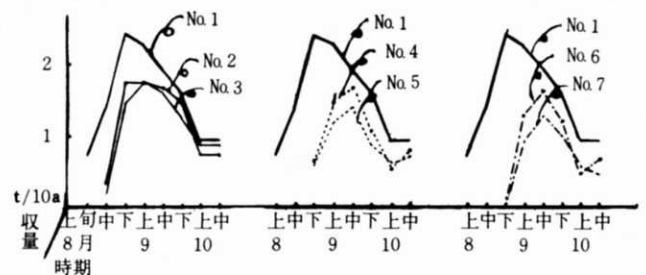
試験区	品質別		正 常 果		曲 果		屑 果		計	
	個 数	重 量	個 数	重 量	個 数	重 量	個 数	重 量	個 数	重 量
No. 1	1,174	111.49 Kg	879	86.51 Kg	679	65.68 Kg	2,732	263.67 Kg		
No. 2	864	77.29	682	62.14	421	42.55	1,967	181.98		
No. 3	806	73.00	664	59.82	373	37.49	1,843	170.31		
No. 4	681	60.94	474	44.46	323	29.64	1,478	135.03		
No. 5	630	55.82	418	36.68	264	24.86	1,312	117.36		
No. 6	594	50.07	432	38.07	285	26.67	1,311	114.81		
No. 7	467	39.98	375	31.63	230	20.71	1,072	92.30		

終了後の10月21日に調査した結果では、株間の広狭にかかわらず、は種期が早いほど分枝の伸長がおう盛であり、同一は種期内では株間が広いほうが1次分枝の伸長は劣り、2次分枝の伸長はまさる傾向がみられた。

は遅れ、各時期別の収量も少なくなっていた。同一は種期内では株間が広いほうは狭いほうに比べて前期に少なく、後期にその差が小さくなる傾向がみられた。



第1図 品質別収量



第2図 時期別収量

(1) 総収量 は種期がおそいほど少なくなっており、また、同一は種期内では株間の狭いほうが多くなっていた。

(2) 品質別収量 品質別収量割合は、は種期、株間を異にしても、各区ともに差がないようであり、総収量が多いほど正常果の絶対量も多かった。

(3) 時期別収量 は種期がおそいほど当然収穫始め

3 収益試算 1965~1970年の月別の平均単価(東京市場)をもとにして10a当りの粗収入を試算すると次のようになる。

No. 1	651,800円	平均単価Kg当り
No. 2	482,500円	
No. 3	473,200円	8月 55円
No. 4	385,400円	9月 75円
No. 5	341,400円	10月 102円
No. 6	329,000円	
No. 7	269,300円	

このことから本試験の範囲内では、同一うね幅による場合、おそまき密植によって後期収量の増大を図ることは困難であることがわかった。

4 問 題 点

1 本試験は側枝着果型の品種を用いたが、初期収

量の高い主枝着果型の品種で検討する必要がある。

2 パイプ支柱の規格を改良し、うね幅をせばめさらに栽植密度を高めることにより減収を軽減することは可能であろう。

3 経営的には前作の収益を加算して考慮する必要がある。

ビニールハウスキュウリのくん炭養液栽培に関する研究

松 本 良 一 郎

(岩手県園試南部分場)

1 ま え が き

れき耕栽培から発展した養液栽培もその方法に砂耕、従来の小れきかられきの大きいもの等の栽培がある。一方、育苗方法も養液育苗と発展し共同大量育苗の方法となってきた。そのなかでもくん炭による育苗法の普及はめざましいものがある。この育苗から延長してくん炭培地の量を増してキュウリの養液栽培とした。くん炭による培地の方法、養液の種類が生育、収量に及ぼす影響を検討した。

2 試 験 方 法

1 供試ハウス

ビニールハウス 3.6 m × 10.8 m, 2棟

2 供試条件

○培地法

A. 平床、床幅90 cmにくん炭を8 cmの厚さにし、床長1.8 mに129.6 lのくん炭を供用(1 m²当り80 l)

B. ポリ袋鉢 50 cm × 50 cm袋にくん炭10.8 lを入れ、床長1.8 mに12鉢を置きくん炭量を129.6 lとした。

○供試液肥

A. 大塚ハウス肥料1号(300 g入) N10%, P8%, K23%, 苦土5%, ほう素0.1%, マンガン0.1%, キレート鉄0.18%。大塚ハウス肥料2号 N11%。

B. 住友液肥2号 N10%, P5%, K8%。

3 養液の濃度

大塚ハウス肥料1号, 2号計500 gを600倍で供試, 住友液肥2号520 gを600倍で供試。

4 区制および面積

①大塚肥料ポリ袋鉢, ②大塚肥料平床, ③住友液肥ポリ袋鉢, ④住友液肥平床, 1区面積 幅90 cm長さ10.8 m, 1区制。

5 供試品種 松のみどり, 夏埼落2号, 新交3号

6 は種および定植

2月25日は種, 4月28日定植。

7 養液使用法, 回数

養液は各区とも1回に300 lを作り使用すると液の厚さ3 cmとなる。ペット内の液が0 cmとなった時に養液を補給し3 cmとする方法の湛液栽培法とした。補給使用回数は高温, 乾燥, 雨天, 曇天とその月により異なるため不定期である。

養液使用回数は第1表に示すごとく4月定植時にはa当り3,000 lを使用し5月よりキュウリの伸長と気象上昇によりその回数を増した。

第1表 養液使用量

(a 当り)

月	回数	液 量 (600倍)	N		P		K		苦 土 大 塚	マンガン ホウソ 大 塚
			大 塚	住 友	大 塚	住 友	大 塚	住 友		
4 月	1回	3,000 l	520 ^g	520 ^g	240 ^g	260 ^g	690 ^g	416 ^g	150 ^g	5 ^g
5 月	4回	6,000	1,040	1,040	480	520	1,380	832	300	10
6 月	8回	12,000	2,080	2,080	960	1,040	2,780	1,664	600	20
7 月	11回	16,500	2,860	2,860	1,320	1,430	3,795	2,288	750	27.5
計		37,500	6,500	6,500	3,100	3,250	8,585	5,198	1,800	62.5